

広領域連携型基幹研究プロジェクト
異分野融合による「総合書物学」の構築

中間評価報告書（第2次評価）

1. 総合評価

順調に進んでおり、質的・量的側面から十分な成果が見られる

2. 総合所見及び特記事項

(総合所見)

各ユニットとも、1、2年目に比べて3年目の研究成果は飛躍的にあがったと評価できる。「延喜式」ユニット、「日本語歴史コーパス」ユニットはシンポジウム・研究会を継続的に開催しており、論文などの成果発表も多く、大いに期待できる（「キリシタン文学」ユニットは後述）。しかし、「総合書物学とはなにか」という重要な命題が確定していないため、各ユニットの後半3年間の研究計画の方向性が明確でない。それを牽引するはずの「教科書作成」も計画には明記されながらも、いまだ具体化されていないのは残念である。

また、『キリシタンが拓いた日本語文学』や『ザビエルの夢を紡ぐ』などの出版により、高い評価を受け始めた「キリシタン文学」ユニットが計画を変更し、新たに「文化・情報の結節点としての図像」をテーマとした。このユニットがプロジェクトの目的に沿って、どのような成果があげられるか未知数であるが、今後に期待したい。

上記の点も踏まえて、前半3年間で進展した各ユニットの研究成果を生かして、プロジェクトの研究目的を達成するためにも、総括班の指導性がいかに発揮されることが期待される。

(特記事項)

特に、優れている点

- ・「研究成果・研究水準」について、「キリシタン文学」における著書の刊行により国際連携を推進している、「延喜式」におけるデータベース作成と水産品の加工実験が着実に進展している。